

第4回オレ展 男だけの手織作品展 『オレの秘密のロボット工場』

第6号 2017年4月10日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カギャ 奥山卓矢

オレ展趣旨

織りをする人の99%は女性という。
でも、男性だって織ってみると面白い。

不思議なことに、この面白さにハマる男たちが
「手織工房じょうた」には何人もいる。

それならば、男性だけの手織作品展をしようとなったのが
この「オレ展」。

今回は、織りとは程遠いと思われる「ロボット」がテーマ。

熱い男たちの優しい織りが、どうロボットとつながるのか。
きっと、そこに機械と人間の違いを考えつつ、うまくつきあう未来が
見えてくることでしょう。

8人の男達の想いの詰まった手織表現をご覧ください。

会場：gallery CLOSET 武蔵野市吉祥寺本町 3-3-9,2F

会期：2017.04.04（月）～09（日）

時間：12:00～19:00

作者：福森和浩、弓谷照彦、関洋明、南雲仁

田中和広、奥山卓矢、若月薫、城達也



パンフレット



手織工房「じょうた」



糸を巻いたポビン



工房の様子



織り上がった生地で仕立て中

さをり織りとの出会い

はじめて、さをり織りに触れたのは2016年6月。新潟県新潟市にある「うちの実家」という子どもからお年寄りまで自由に立ち寄れる地域に開かれた施設で「さをり織り」に出会いました。

織り機を見た瞬間「織ってみたい！」そんな衝動に駆られました。糸を通して「トントン」と繰り返して織っていくと、一本の糸が布になっていく不思議さに何とも言えない魅力に惹きつけられました。

調べてみると東京の吉祥寺にさをり織りの工房があることが分かり、早速尋ねてみました。工房には色とりどりの糸が並び、あちこちで「トントン」と織る音が響き、何とも言えない居心地のよさを感じました。体験で織らせて頂くと、やっぱり面白く気づいたら夢中になっていました。休憩の時間には会員のどなたかが作ってくれたケーキを皆で食べたり、おしゃべりしたり自由気ままです。

誰かの作品が織りあがると「〇〇さんの作品です！」と紹介され、「いいですね、素敵!」「きれいな色!」と会話が広がります。

さをり織りを通して、新たなコミュニティとの出会いに新鮮さもありますが、それ以上に新たな自分との出会いに驚きでもあるのです。

オレ展を通して感じること

今回初めて作品を出展するにあたって、何度も仕事終わりに工房に集まり、どんな企画にしようか打ち合わせを重ねました。

決して器用ではない自分が織りをはじめ、その魅力を共有できる仲間と共に今回に至りました。締め切りぎりぎりまで織って、仕立てて、ミシンも小学校の家庭科の授業ぶりに使い、



オレ展メンバーの紹介



十人十色の作品



初仕立て作品

お問い合わせ先

株式会社カグヤ

東京都新宿区西新宿 3-2-11

新宿三井ビルディング 2 号館 10 階

tel:03-5909-7155

悪戦苦闘しながら何とか教わりながら仕上がりました。

手仕事のぬくもりのはずが、本当の仕事のように追われたり、工房へ夜行っては織り進めるよりもビールのほうが進んだり（笑）。そのやり取りも全部面白く、皆様に見て頂くことが叶いました。

普段パソコンを使って仕事をする人が多いからか、手織だからこその味わい、豊かさをより一層感じるのです。日本昔話でよく、おじいさんとおばあさんが昼は畑仕事をし、夜は縄を編んだり、草履を作るシーンを見かけます。仕事終わりの夜に織っていると、「自分も同じことをしている！」と感じ、手仕事という豊かさに気持ちが落ち着き、日中の疲れも忘れ夢中になってしまいます。

「さをり織り」の願いの一つに、機械と人間の違いを考えよう。ということがあります。保育という仕事に携わる者として、子どもたちに自分は何が出来るか、そんなことをよく考えます。

親子で織り体験に来てたお母さんがこんな会話をしていました。

「そんなに急いで織らなくていいんだよ、ゆっくりでいいんだよ」何の気なしに言ったと思うのですが、私にはハッとする一言で、「そうか、ゆっくりでいいのか」と心の中で繰り返し呟きました。

機械のように速く精密には織れませんが、多少曲がっても、

「これもお愛嬌！」と受け入れてしまう度量の深さは機械より上手かもしれません（笑）。

織りもあまく、裁断もミシン縫いも曲がり、決してお店のショーウィンドーに並ぶことはありません。ただ、アルパカの糸を染め、それを縦糸にして使い、沢山の方から教わり仕上がった一着で、私にとっては子どもたちに自慢できる逸品です。

出来ることが一つ増えることはやっぱり嬉しく「一緒に喜ぶ」という素敵な感情を神様は授けてくれたのだと改めて思うのです。

（報告者：株式会社カグヤ 奥山卓矢）